

戦後混乱期の追憶

米津 惟

昭和二十年八月十五日、日本は連合国に対して降伏した。国民にも終戦が伝えられた。日本の国土は全て破壊された。国民は家も、家族も、大勢の命も失いどん底に突き落とされた。その悲惨な体験は「私の戦争体験の回想」と題して向日市のホームページや西宮市役所、豊中市役所の人権平和センターのホームページに掲載して頂いている。今回は戦後の混乱した時代を生き抜いて来た私の体験を書き留めた。

私は昭和十二年八月豊中市蛍池にて誕生し、幼くして戦災に遭い、家族も家も全て失い一人ぼっちになってしまった。八才の暑苦しい夏の日、焼け残った物置小屋で寝起きしていた。当時六年生の友達と一緒に行動していた。町内会長さんにも世話になったが何を食べていたのか思い出せない。友達と色々悪いことばかりしていたように思う。阪急蛍池駅前の道路をアメリカの兵隊が何台もの車で凄いスピードで走って来る。初

めて見た車だ。「あれがジープと言う車で進駐軍や」と友達が教えてくれた。近くに日本軍の飛行場があるのでそこを占領したのでだろう。駅前の広場で夕方になると数人のアメリカ兵と数人の日本人女性が一緒に居て、賑やかに話しているのをよく見掛けた。初めて見たアメリカ兵は背が高く格好良かった。側へ行くと、「ヘイボーイ」と言って、チヨコレートをくれた。初めて食べた味だった。一か月ほど経ったころ、電車や汽車が開通したのか、伯父になる人が来てくれた。私には初対面だったので不安な気持ちを抱え、焼け残った仏壇の中から父母の位牌や過去帳を持って、伯父について行く。行き先は私の母の実家である西舞鶴。母は女姉妹五人の四女。長女の伯母が跡取りで伯父は婿養子。当時は祖母も健在でした。伯母には八人の子どもが居て七番目が私と同年。食糧難の時代、私が世話になることで食べ物の分け前が減るので、いつも邪魔者扱い。何かにつけて苛めにあった。伯父は見て見ぬふり。祖母は私のことを庇ってくれたが、何とも言えない嫌な辛い毎日だった。家を出たくても行く所が無い。中学校を卒業するまでは、我慢我慢。世に出たら必ず見返してやる。こんなことで負けてたまるか!!。こんな生活の中で私の根性が出来上がったと思う。

学校は田辺城の西にある「明倫小学校」。二年生の三学期に豊中から転校した。担任の先生は女性だった。先生は女学校時代に私の母と同級生で仲の良い友達だったそう。母は私が二才の時に亡くなっているので面影も記憶もないが、先生は母の話を色々と聞かせて下さった。ある日先生が私に休み時間に職員室に来てと仰ったので行ってみると、先生は赤ちゃんを抱き母乳を飲ませていた。先生は、母を知らない私に「米津君もな、赤ちゃんの時はこのようにお母さんのオツパイを飲んで育ったんやで」と色々とお母さんの話を話してくださった。当時は産休も無かったのか、先生のお母さんが時間をきめて赤ちゃんをつれて来られていた。

敗戦後の食糧難でまともに食べられない日が続き、色々な病気が流行した。コレラ、発疹チフス、腸チフス、天然痘等で、そのたびに予防注射を受けた。体育館で一列に並び、一本の注射器で同じ針で何人も順番に注射していく。今思うと何と恐ろしいことをしていたのか。人間扱いきれず、動物並だのみ しらみ なんきんむしと思う。

また、寄生虫が蔓延していた。蚤のみ。虱しらみ。南京虫なんきんむし。女子はほとんど毛髪に虱をわかしていた。校庭に男子も女子もパンツ一枚になって並び、頭からパンツの中まで殺虫剤、「D

D T」を浴びせられた。白い粉末なので全員が「オバケ」みたいにされた。人間扱いされて
いない。とにかく蚤や虱に刺されると痒くてたまらなかった。天然痘の予防注射は腕に
五カ所針の束で傷をつけて薬を注入された。痛かった。私たちの年代の人は今でも腕の
横に傷跡が五カ所あるはずだ。

小学校五年生の時から新聞配達のアルバイトを始めた。当時、販売店は各社の新聞を
一括して扱っており、戸別に間違いが無いように気を付けて配達した。舞鶴は雨や雪が
よく降り、穴のあいた継ぎ接ぎだらけのゴム長グツだったので足が冷たくて辛かった。
私の配達区は「寺内」、「西町」で、お寺が四軒もあり、雪や雨の日は高い石段の上り下り
は怖い思いをした。冬の配達は辛かった。配り終りの家は漁師の網元の家。寒い日はお
内儀さんが牛乳を温めて待っていてくださった。かじかんだ両手で握り締めて飲んだ牛
乳は、美味しく涙があふれ出た。親の愛は知らずに来たが世間の人は情があった。貯め
たお金で中学校入学の詰め襟の学生服を買った。五ツの金ボタン。中学卒業まで五年間
頑張った。自分で自分をほめてやった。今では良い思い出だ。

終戦から五年後。昭和二十五年。「南北朝鮮戦争」が始まり、今まで見向きもされなか

った鉄屑が売れるようになった。舞鶴港前の空地を掘り返すと鉄屑が沢山出て来るので、持てるだけ集めて屑鉄屋に持って行くと、一貫区3・75kgあたり五十円で買ってくれた。早朝新聞配達に行く前に堀に行つた事もあつた。良い小遣い稼ぎになつた。朝鮮戦争のおかげで日本の経済は立ち直つたと言われている。「糸へん景気金へん景気」と言われていた。

中学校は城の北にある城北中学校に入学。舞鶴湾内にある白杉、青井、吉田、大君地区の生徒達は「大丹丸」と言う船で通学して来る。高野川の河口の所に大丹丸の船着場がありそこで乗船下船していた。また、漁連のある吉原地区の生徒達とも一緒にになり、小学校時代とは違う友達も沢山できた。吉原地区は魚を扱う商売をしている家の生徒が多く居た。吉田地区の友達と仲良くなり、夏休みには泊まりがけで魚釣りや水泳を楽しんだ。彼は五人兄弟の長男で、親父さんは大工さんで農家でもあつた。また、お母さんがとても良い人で、私を自分の子供と同じように扱ってくれた。ご飯も魚も卵も沢山食べさせていた。弟さん達とも仲良くなり、お母さんにはとてもお世話になつた。彼とは中学校を卒業して一緒に京都に出て、同じ大工の道に進んだ。修行する店は別々

だったが、彼のお母さん、お父さんは修行に出る当日、二人の息子を送り出すように、お互いに辛いことがあるやろうけどがんばりやと手を握り涙を流して送り出してくれた。お互い昼間は現場で仕事をし、夜は建築学校の夜間部で勉強して頑張った。その彼は七十才の時、病いで帰らぬ人になった。私には唯一人、兄弟のような仲だったので淋しい。

中舞鶴には日本海軍の根拠地があって、昭和二十年七月三十日に延二四〇機の艦載機による大爆撃で、港湾施設や多数の船舶が攻撃され、死者も二百人以上出たようだ。戦後も長く舞鶴湾内には沢山の船が沈んでおり、海面からマストだけが林のようにつき出ているのを良く覚えている。湾の入り口には米軍の投下した機雷が沈んでおり、漁師の底引網に引っかかって上がる事が度々あった。それを爆破処理するのに、船舶は航行止になり、船で通学していた生徒達は休校になった事が度々あった。

昭和二十年九月から、舞鶴港がシベリアからの引揚船の港に指定された。私は、夏休みの間は良く港に魚釣りに行っており、水先案内の船「千鳥丸」の船長さんと知り合いになり、良く可愛がってもらった。ある日、「これから引揚げ船を迎えに行くが一緒に行

くか」と言われ、私は船に乗せてもらった。舞鶴湾を出て冠島を後にすると、島一つ見えない大海原、水平線のかなたに筒のような物が見え出した。先の方から煙のような物が見える。すると船長が言うには、「あれが引揚げ船の煙突や」と教えてくれた。両船が出会うまで、どンドン沖に出て行く。やがて船が目の前まで追って来た。大きな船だ。甲板には、着のみ着のまま男も女も日焼けした顔の引揚げ者達が、ちぎれんばかりに手を振り、みんな涙を流しながら笑っている。日本に帰って来て初めて私達を見て、感極まったのだらう。私も思わず手を振り、お帰りなさいと何度も叫び、涙がこみ上げてきたのをよく覚えていいる。私の乗った船は、旋回して引揚げ船と並行しながら先を走り港に帰った。引揚げ船は、しばらく湾内に停泊してから、入港接岸したようだ。引揚げ者の皆さん本当にご苦労さまでした。

昭和二十年九月から始まり、三十三年九月を最後に、舞鶴港には延べ三四六隻の引揚げ船が入港して、総数六十六万三千人が舞鶴港に上陸したそうだ。これには色々なドラマがあった。歌の「岩壁の母」等は有名だった。

私が今でも良く覚えている船は、興安丸、白山丸、第一大拓丸、高砂丸だ。高砂丸は、

元病院船で姿形が美しい船で、一番好きな船だった。海の記念日に、明倫小学校の六年生と五年生全員が、高砂丸に乗せてもらって舞鶴湾を出て冠島まで往復した楽しい思い出もある。また、浮島丸事件もあった。

終戦後の八月二十四日、浮島丸は朝鮮出身の労働者を、青森県から乗せて朝鮮半島に向かう途中に、何故か舞鶴に立ち寄り、湾内で謎の爆発沈没した。約六百人が死亡したといわれている。原因は今でも謎のままのようだ。

私にとって舞鶴は、苦しい、辛い思い出の方が多かったが、八年間お世話になった第二の古里だ。中学生時代の友達も沢山できて、今でも時々電話して話している。男性も女性も、伴侶を亡くされて一人暮らしが多い。女性は色々世間話や昔の話に付き合ってくれて楽しいです。

平成二十七年十二月十九日土曜日

京都新聞「窓」、「読者の声」で次の記事を読んだ。(原文のまま)

「終戦直後 埋もれた惨事」当時八十八才

終戦後、連合軍司令部。「GHQ」から日本国内に残った弾薬を全て処理するよう命令が出たのが、七十年前の十月半ばのころだった。私は当時、警察官として舞鶴で勤務しており警護の任務がのしかかった。宇治の火薬庫にあった大量の弾薬が貨車に積み込まれて、危険を伴いながら夜間に運び込まれた。西舞鶴駅で停車して、少しずつ海舞鶴駅へと移され、舞鶴湾沖に投棄された。作業は、地元の消防団員の協力を得て行われた。弾薬を積み込んだ三隻の舟をつなぎ、親船がけん引して沖合へ運び、弾薬を海底に捨てた。三回目の投棄の時だったか、けん引されていた真ん中の舟が、何かの弾みで爆発して全員が死亡するという惨事が起きた。この事故は秘密として取り扱われて、その夜は納棺された遺体を同僚と共に追悼で見守った。葬儀は寺院でひっそりと営まれた。今年には戦後七十年になるが、終戦後にもこのような戦争の犠牲者があったことを忘れてはならない。それにしても、爆弾の処理に駆り出されて犠牲になった人たちには十分な補償が行われたのだろうか。翌年に警察官を辞めて故郷に戻った私は今もその後のことを知る由もない。

私はこの記事を読み終わってはっ!!とした。

思い当たることがある。昭和二十四年ごろ、舞鶴湾の内外で鯖の大漁が続いた。今、魚屋で見るとよりかはるかに大きな鯖。胃袋にはオキアミがギッシリ詰まっていた。今は亡き妻の実家は、西舞鶴の港の側にあつて、祖父の代から船を持って海運業を営み、貨物の他に漁師が水揚げした魚を各地の漁連に運んでいた。親父と一緒に働いていた義兄の話によると、鯖の大漁が続き、底引き網に鯖と一緒に弾薬や砲弾が大量に上がってきたと言う。湾の外の博奕岬で網にかかつて上がってきた箱の中身を触り体中が赤く腫れ上がった漁師もいたそうだ。

これは連合国軍総司令部、GHQの命令で、舞鶴湾に投棄された弾薬であろう機雷も度々見つかった。義兄はその後、特命を受けて、漁船や貨物船で船団を組み、弾薬を引き上げる作業に携わっていた。大型の熊手のような鉄製のカゴを作り、ロープで船とつながり海底に下ろして引き廻すと、長さ一メートル砲弾が次々に揚がってきた。それらの弾薬をまとめて福井県の敦賀湾にあった処理場へ運んだそうだ。処理場では、砲弾が爆発して犠牲者も出たそうだ。義兄は、当時は本当に「恐ろしく命がけの仕事だった。今思い出してもぞーっとする」と思い出を語ってくれた。私もこの原稿を書きながら舞鶴

の白杉や青井の同級生に電話してみると、「そうやそうやそんな事があったな。昔のこと色々思い出すなー」と共感してくれた。機雷の爆破処理した後には魚が大量に海面に浮き上がって、それを小舟で拾い集めてた人もあった。かなり大きな魚も上がってたようだ。戦後も舞鶴には色々な出来事があった。まだまだ思い出して書くことは山ほどありますがこのくらいにしておく。

舞鶴は、秋から冬の間は雨や雪がよく降る所で寒かったが、魚は美味しかった。今は亡き妻とは、小学校四、五、六年生の時の同級生で同じクラスだった。色々縁があって夫婦になり、盆や正月には必ず墓参りと里帰りをする。吉田地区の友人のお母さんにも、必ず出向いた。妻の実家のお母さんは、正月に帰った時、庭に山のように積もった雪の中から、年末に「伊根の定置網にかかったブリや」と笑う義兄がくれたんやと言う、長さ一メートルもある寒ブリを引張り出して 豪快に捌いてくれた。ブリ三昧、堪能するまで食べさせていただきました。こんな美味しい思い出もあります。舞鶴の魚は美味しい。

令和六年五月書